
ひぐらしのなく頃に～粗探し編～

千花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に〜粗探し編〜

【Nコード】

N5217F

【作者名】

千花

【あらすじ】

コナン×ひぐらしのファンフィクションです

1・博士の車（前書き）

この小説はひぐらしのネタバレがあります。それと、時代とかコナ
ンたちの学校のことを気にしたら負けです。ものを書くのははじめ
てなので至らない点も多いですが、楽しんで頂ければ幸いです

1・博士の車

「みんな〜！準備はいいかのオ！」

「「「オー！！」「」」

博士の呼びかけに歩美、元太、光彦は元気に答える。灰原は、相変わらず眠たそうにアクビをしていた。

「ねえねえ博士、これから行くひめみざわ村ってどんなところ？」

「違いますよ、歩美ちゃん。ひめみざわじゃなくて雛見沢ですよ」

「雛見沢は自然がいっぱいの美しい村じゃぞ」

「うなぎ、いるか!？」

「うなぎはどうかのオ。でも山菜がともうまいんじゃ!」

「「「へ〜!!」「」」

「あら、行ったことあるの？」

「ああ。実は雛見沢ダム計画というのがあって、雛見沢は村ごとダムに沈められるはずだったんじゃ。それを阻止しようとする住民たちが雛見沢観光ツアーを実施しているの。ワシはそれに参加したんじゃ」

「ダム計画と観光ツアーって関係あるの？」

「外からきた人たちにアピールするためだよ。こんなに美しい村を失ってもいいのかってね」

「へー…」

「でも今も村が残ってるということは、ダム計画は中止になったということですよね？」

「そうじゃ。雞見沢はダム戦争に勝ったんじゃ」

それにしてもめずらしいな。国が一度決めたことをくつがえすなんて

その考えが伝わったかどうかはわからないが、博士はこう続けた。

「当時は相当激しかったそうじゃからな。流血沙汰にもなったとか」

「マジかよ」

「あまり穏やかじゃありませんねえ」

「ちよつと怖いかも…」

「なあに、今は関係なかるう。もうダム戦争は終わつとるんじゃ。

さあさ、さっきの話は忘れて歌でも歌おう。何がいいかのオ」

「「「仮面ヤイバー!!!」」」

一瞬暗くなりかけた空気が子どもたちの元気な歌声で消しとんだ。
博士もホツとしたようだ。

オレも歌に参加したらさつきとはまた違った空気が流れた。

2・エンジェルモート

「着いたぞ」

そう言つて博士は車を止めた

「ここが雛見沢？」

「違うぞ歩美ちゃん、ここは興宮じゃ。雛見沢まであと少しじゃが、その前に腹ごしらえをしようと思つてな」

「サンセー！！」

元太が元気よく答える

そしてオレたちはエンジェルモートという店に入った

「いらつしゃいませ、6名様ですね。おタバコはお吸いになりますか？」

「……………えっ！？あつ、吸いません」

「かしこまりました。お席をご案内致します」

「はあ」

店員の派手な格好を見て博士は少し戸惑っていた

「かわいい制服だね！歩美も着たいなあ」

かわいいってどうか…

「やめておきなさい。まああの探偵事務所の子が着れば、誰かさんは泣いて喜ぶでしょうけど」

と言いながら灰原が俺の方をチラツと見る

「ハハ…」

オレたちが席に着くと同時に隣の席でどよめきが起こった

「にやにや！この人たちは店員じゃにやいのか！？」

「部活う！？こんなおいしい部活が存在するのか！？！？」

「うらやましすぎる！！こんな部活なら我輩も入部したいでござる

！……」

何事かと思ひ振り向くと、店員よりも奇抜な格好をした3人の女の子が一人の少年を囲んでいた

「ぬあーはっはっはっは！苦しゅうないぞ〜！！梨花ちゃんは紅茶をもつてきてくれ！沙都子はケーキを！もちろん渡す時は“お待たせしました。ご主人様”と言うんだぞー！！！監督も誘えばよかつたなー！魅音はそうだな…肩でも揉んでもらおうか！」

オレ達は開いた口が塞がらなかった

「何なんですか？あれ」

「アホだな…」

「それは間違いないわね」

そんなことを話してゐるうちに、さっきの店員が注文を取りにきた

「オレ、うな重！」

「歩美、お子様ランチ！」

「ボクはグラタンにします」

あれ？

「お姉さん、あそこにいるお姉さんにソックリだね」

「ああ、わたしたち双子なんですよ。圭ちゃん！もっとお姉をこき使ってくれてオツケーですよ〜！」

「コラ詩音ん！あんたは関係ないでしょお！！」

「すいませんねえ、騒がしくて。ご注文は以上でよろしいですか？注文を聞き終えると詩音は厨房の方へ去っていった。

隣の席は相変わらず騒がしい

「ほら、レナもなんか頼めよ！俺たち水鉄砲勝負に勝ったんだからな！」

「レナはもう見てるだけで幸せ…はう〜」

「それにしてもすごかったよね〜！圭ちゃんとレナの一騎打ち！！おじさんまで熱くなっちゃったよ」

「この前はレナさんに一本とられてしまいました、次はそうは参

りませんわよ！圭一さんも覚悟してくださいませ！」

「おう！受けてたつぜ！」

そう言つて圭一が立ち上がった瞬間、飲み物を運んでいる詩音にぶつかった。

そしてその衝撃でグラスがオレの方に飛んでき…え？

バツシャーン！！！！

シーン…

「……………うわあああ、ごごごめんなさいっ！！！」

慌てて詩音がオレに謝る

「わ、ワリい」

「わたしじゃなくて、この子に謝ってください！」

詩音にきつく言われた圭一がオレの前にしゃがんだ

「ごめんな、大丈夫か？」「う、うん。大丈夫だよ」

「お洋服がベトベトでかわいそかわいそなのです」突然女の子が頭をなでてきたので驚いた

灰原はその様子を見てクスクスと笑っている

「罰ゲーム用の服ならいっぱいあるんだけどなあ」

「遠慮しとくよ…」

「そうですよ、お姉。誰がそんな服着たがるんですか」

「替えの服持つてるから、貸してもらわなくても平気だよ」

「ところでこのへんでは見ない顔ですけど、どこからきたのですか？」

「東京からじゃよ。雛見沢に行こうと思つてのオ」

「あんなど田舎を観光ですか？富竹さんといい、都会の人は変わつてますねえ」

「よーし！じゃあこうなつたお詫びに、部活メンバーが雛見沢を案内しちゃいましょう！みんな、いいよね！？」

「「「オーツ！」「」」」

「そこまでしてもらうとなんだか悪いのオ……」

「歩美はお姉さんたちと一緒に行きたいなあ。みんなは？」

「ボクもです」

「オレも。なんだか楽しそうだしよ！」

「まあまあ博士、あっちも楽しんでもみただしいんじゃないか？」

「そうじゃな……じゃあお願いしようかのオ」

「決まりだね！じゃあ食べ終わったら出発しよう！」

どうやら思っていたよりずっと賑やかな旅行になりそうだ

3・難見沢

「それじゃまずは自己紹介！わたしは部長の園崎魅音！我が部の期待の新人、口先の魔術師こと前原圭一！帽子をかぶっているのが竜宮レナ！レナは普段おとなしいけど、かあいいモードのレナは最強だよ！北条沙都子はトラップの名人！沙都子の隣にいるのが古手梨花！梨花ちゃんはけっこうタヌキだから油断できないよ！」

さつき頭をなでてきた梨花と目が合った

「には〜」

「に、には〜…」

「ワシは阿笠博士じゃ。みんなからはハカセと呼ばれておるよ。この子は江戸川コナンくんで、この子が吉田歩美くん、円谷光彦くん、小嶋元太くん、そしてこの子が灰原哀くんじゃ」

「江戸川コナンって、なんか探偵みたいでカッコイイ名前だな」

「探偵はコナンだけじゃないぞ！」

「ボクたちは少年探偵団なんです！」

「少年探偵団かあ！いいねいいね！おじさん気に入っちゃった」

「魅音お姉さんの部活はどんなことをするの？」

「ゲームだよ。でもただのゲームじゃないよ！全員が1位を目指して真剣勝負！勝つためなら手段を選ばない！負けたら厳しい罰ゲームがまっているという、仁義なき戦いなんだから！！…あつ、ここが古手神社だよ」

「ここにはオヤシロさまが奉られているんだよ。」

「ボクと沙都子のおウチでもあるのです」

「おウチが神社なんてすごーい！！」

「みい〜 歩美も一緒に住むですか？」

「あつ！あれ富竹さんと鷹野さんじゃないか？」

「クスクス、今日は随分と賑やかなのね」

「鷹野三四さんは入江診療所の看護婦さんで、富竹ジロウさんは毎年綿流しの季節になるとやって来るフリーのカメラマンだよ」

「綿流しってなあに？」

「6月にやるお祭りのことだよ。今年はもうすぐだね。富竹さんに鷹野さん、こちらは東京から来た少年探偵団のみなさんです」

「……こんにちは！」

「こんにちは。へえ、あなたたち探偵なの。だったら雛見沢村連続怪死事件の謎を説き明かしてくれるかしら？」

え？

「……れ、連続怪死事件ん？」

「あら、知らないの？毎年綿流しの日に1人が死に、1人が消える……。今年は誰が犠牲になるのかしらね。クスクス」

「た、鷹野さんやめなよ。怖がらせちゃ悪いよ……」

「あら、ごめんなさい。じゃあ私たちはこれで失礼するわ。この話に興味をもつたらいつでも聞きにきて。」

雛見沢村の歴史も含めてたっぷりとお話するわ」

「……ごめんね。あの人、人を怖がらせるのが好きなんだよね。村の子どもたちにもいろんな話を吹き込んでるよ」

「べ、べべ別に怖がつてなんかいませんよ！」

「オ、オウよ！貝飯事件だか鯛飯事件だか知らねえが、オレたち少年探偵団にかかればなんてことねえよ！」

「……怪死事件ですよ」

「そうだよ！ねえコナン君！」

「えっ！あ、ああ……」

「さあさ！次は裏山へ参りますわよ！わたくしの自慢のトラップの数々をご紹介しますわー！」

雛見沢村連続怪死事件…か

4・雛見沢村連続怪死事件（鷹野サイド）

興宮の図書館で調べ物をしていると、突然1人の子どもに声をかけられた

「あら、あなたはきのこの…たしかコナン君だっけ？」

「うん。鷹野さんに聞きたいことがあって」

「もしかして、雛見沢村連続怪死事件のことかしら？」

「コナン君、またぬけがけですか？」

「ずるいぞコナン」

「おまえら！なんでここにいるんだ！？」

「ホテルからからずーっとつけてきたんだよ！ねー、哀ちゃん」

「あのなあ」

「クスクス…ほらほら喧嘩しないで。ちゃんとみんなに話してあげるわ。とりあえず向こうに座りましょう」

椅子に座ると、目の前に興味津々の顔が並んだ

それが面白くて、ちよっともったいぶりながら話し始める

「さて…と、どこから話そうかしら。あなたたちダム戦争は知っているかしら？」

「うん。博士が車で話してくれたよ」

「流血沙汰にもなったとか言ってたよな」

「クスクス…そうね。当時は鬼ヶ淵死守同盟っていうのを作って、警官隊と激しくやり合ってたからね。魅音ちゃんもダム建設反対運動に積極的に参加したらしいわ」

「あの姉ちゃんならやりそうだなあ」

「そんな時、ある猟奇的事件がおきたの」

「猟奇的事件？」

「ダム建設の現場監督が関係者6人に殺されたのよ。バラバラにされてね」

「バ、バラバラに!？」

「でもその十字架の重荷に堪えられなくなった1人が自供したのよ。それで他の人たちも逮捕されたってわけ。主犯格の男を除いてね…」

「ま、まだその人見つかってないんですか？」

「ええ、その男が持っていた監督の右腕もね。鬼ヶ淵沼に沈んでしまったなんて噂もあるわ。あそこ底無し沼だから」

「でもよー、なんでそんなひでえ事したんだ？」

「や、やっぱり死体を隠しやすくするためじゃないでしょうか…」

「いや、違うな」

コナンがきつぱりと否定する。なかなか賢いじゃない、この坊や…

「ええ、確かにそれもあるでしょうけど本当の目的は別!私とその主犯格の男だったらその場にいた全員に死体を切断させて、各自が責任を持つて切断した部分を隠すように指示するわ。犯した罪が平等になるようにね。罪が重ければその分堅く口を閉ざすでしょうか」

「哀ちゃんコワイ…」

「正解!なかなかの推理力ね。」

そこまでわかっていながら顔色ひとつ変えないこの2人を、私は少し不気味に感じていた

何なの?この子達…。本当に小学生?

「でも事件はこれで終わらなかった。翌年の綿流しの日、北条夫妻が白川公園で転落死してしまったの。沙都子ちゃんの両親ね。夫の死体は見つかったんだけど妻の方は見つからないまま。この件は事故として片付けられたんだけど、村では“オヤシロさまの祟りだ”と噂されるようになったの。北条氏はダム建設推進派のリーダーで、村八分にされてたからね」

「そういえばレナお姉さんが言ってたね。古手神社にはオヤシロさまが奉られているって!」

「そうよ。ちなみに梨花ちゃんもオヤシロさまの生まれ変わりなん

て言われて、村の老人たちに崇められているのよ」

「へー…」

「その翌年の綿流しの日、古手家当主が原因不明の病に倒れ、亡くなった。古手家当主はいわゆる日和見主義者で、それを良く思っていない村人もいたそうよ。当主の妻は遺書を残して鬼ヶ淵沼に身を投げ、自殺。死体は見つかっていないわ。そして去年の綿流しの日、沙都子ちゃんの叔母が撲殺され、お兄さんの悟史くんが行方不明。叔母を撲殺した犯人は捕まったけど、その後スプーンを飲んで自殺したそうよ。もうここまでくると誰も崇りを馬鹿にしなくなった。あの部活メンバーも案外信じてるかもしれないわね。オヤシロさまの祟り…」

「なんか怖いね…。ホントに祟りなのかな」

「今年も何か起こるんでしょうか…」

「もしかして…!」

「元太君なにかわかったの!？」

「現場監督の右腕ってまだ見つかってないんだろ!？」

「ええ、そうよ」

「じゃあその右腕が毎年綿流しの日にひとりで動いて、事件を起こしてるんじゃないか!？」

「元太君…、それ絶対違うと思いますよ」

「クスクス…面白い説ね。私は人間の仕業だと思うわ。御三家、特に園崎家のね…」

「御三家？」

「村の取り決めは公由家・園崎家・古手家が会議をして行うの。でも実際は、園崎家頭首のお魘が全ての実権を握っている状態ね。…そうそう魅音ちゃんは園崎家の次期頭首なのよ。園崎家が雛見沢村連続怪死事件の犯人なら、魅音ちゃんも何か知っているかもしれないわね…」

「歩美は魅音お姉さんが悪い人だとは思わないけどなあ」

「ボクもそう思います!」

「オレも！あの姉ちゃん面白いし、いい奴だよな」

「あらあら随分と好かれているのね。…それじゃお喋りはこれでおしまい。小さな探偵君たちが事件の真相を暴いてくれるのを、楽しみに待ってるわ…クスクス」

5・部活（圭一サイド）

魅音がロッカーからのいろいろなゲームを引つ張り出している時、教室のドアが開いた

「おっ！少年探偵団くんたちじゃん！」

「これから部活ですか？」

「そうだよ！」

「歩美たちもやりたーい！」

「ホントに！？言つとくけど、初めてだからって容赦しないよ？」

「のぞむところだぜ！」

「じゃあ、今日のゲームはジジ抜きにしよう！」

「魅いちゃん！それはちょっと厳しいんじゃないかな。かな？」

「なーに甘つちよろいこと言ってるの！！部活は非情だよ？ねー、圭ちゃん！」

「おう！俺もアレには苦しめられたからなー！せいぜい頑張れよ！」

俺も初めての部活の時、ジジ抜きだったなあ！つい最近のことはずなのになんだか懐かしいぜ！

「えーと、どこに置いたかな？このへんに出したと思ったんだけど

……………アレー？」

「ないのか？」

「うん。でもこのへんのと一緒に出しといたんだけど……………うーん」
そう言っつて魅音はしばらくランプを探し続けていた。このへんつて…ゲームの山になつてるぞ

「もしかして、コレ？」

「そうそう、それぞれ！ありがと、コナン君！」

「ったく！人騒がせな奴だな！」

部活メンバーと少年探偵団が交互に席に着き、カードが配られた

「それじゃあ行くよ、光彦君！左からJ、2、6！！」

「な、何でわかるんですかー!?」

「元太君ごめんね…、これがKだよね？」

「マジかよ!?」

「歩美の5をお持ち帰りなのですよ」

「えー！なんでなんで？」

「圭一兄ちゃんのカードは左から3、Q、7、9だよね」

えっ!?と全員が顔をあげる。俺もその1人

「コナン君まで…なんでみんなわかるの？」

「傷だよ。このトランプ、全部に傷がついてるだろ？それを見てカードの番号を当ててるってわけさ」

「くつくつく！さては君、トランプを隠してカードの傷を確かめてたね！どつりでいくら探してもないわけだ」

「うん。もしかしたらそういうイカサマもあるかもしれないなーと思っただ」

こいつは侮れないな…

「き、きつたねー！」

「きたなくないよ！勝つためには手段を選ばないのが部活だからね！元太君たちにも何かできることがあるはずだよ！！」

「をーっほっほっほ！！まあどんなに頑張ってもこのわたくしにはかないっこないですわー！！さあこれが8ですわね！……え？そんなバカな…」

「あら、傷を増やすだけでひっかかるなんて、あなたもまだまだね」
哀が涼しい顔で沙都子に言い返す。うーん、こいつも侮れない！

「その手があったか！灰原、ありがとよ！」

「傷を隠す、という手もありますよ！カードの傷を利用して相手を騙すんです！」

「歩美、ぜーったい負けないもん！！」

「よっしやー！！おもしろくなってきたぜー！」

「前原くん、お客さんが来てますよ」

ちえっ、これからがいいとこなのにな！

「じゃあ悪いけどちょっと行ってくるぜ！」

知恵先生に言われて校庭に行くと、大石とかいう刑事が車に乗るよ
うに言ってきた

「んっふっふっふ。別に捕って食おうってわけじゃないんですから、
そんなに警戒しないでください」

言われるままに車に乗ると、さっそく大石が話しはじめた

「前原さんって前原屋敷の坊ちゃんでしょ？結構有名だったんです
よ」。東京からお金持ちが引越してくるってね！それでお話とい
うのが：おやあ、誰ですかその子？」

大石に聞かれて隣を見るとそこには…

「コナン！？おまえいつのまに？」

「ボクのことは気にせず続けてよ」

「困りましたねえ。ここで話したことは内緒ですよ！」

大石は、雛見沢村連続怪死事件に園崎家が関わっている可能性が高
いということや、レナの前の学校での凶行について話し始めた

「ですから何か変わったことがあったら私に…」

「だから何だよ？」

「え？」

「園崎家なんて関係ない。魅音は大事な仲間だ。レナだって…」

「でもレナさんは前の学校のことを秘密にしていますよね？それでも
仲間だと言えますか？」

コナンがちよっと下を向いた。何か秘密にしていることがあるのだ
ろうか

「仲間だからってなんでも話さなくちゃいけないのかよ？大事な
は今だろ？レナが雛見沢でもう一度新しくやり直したいと思ってい
るなら、それでいいじゃねえか」

コナンがいてくれて良かった

1人だったら大石に言い含められてしまったかもしれないし、今の

俺の言葉がこいつに届いた気がしたからだ

「ねえ、大石さんはなんでそんなにこの事件にこだわるの？」

「もうすぐ私は定年です。だから今年が最後のチャンスなんですよ。それにおやつさん…、殺された現場監督は私の知り合いなんですよ。だからどうしても犯人をこの手で捕まえたいんです。園崎家が黒幕ということとはわかってる。わかっているのに…！」

「本当に園崎家が黒幕なの？大石さんがそうあってほしいと思ってただけなんじゃないの？」

「え？」

「ホームズも言ってたよ！感情的な性質は時には推理を妨げ真実から遠ざけるって…。ボクはあれはただの不幸な事件なんだと思う。大石さんだって心のどこかでそう思ってるんじゃないの？ただそれを認めたくないだけで…」

「それは…！」

大石は俺たちが車を降りるまで黙ったままだった

教室へ戻る途中、俺はコナンになんであそこまで見抜けたのか聞いた
「いや…、ただ周りが思っているような力は、園崎家にはないんじゃないかと思っただけだよ」

「ふーん、なるほどねえ」教室に入ると、何やら騒がしい声が聞こえた

「だから！お香が犯人なんだよ！！」

「違いますよ、元太君！！お麴さんですよ！！」

「だから魅音お姉さんに説得してもらいたいの！もう祟りは止めてっつて…！！」

俺達2人を含めて教室にいる全員の開いた口が塞がらなかった

「あつはつはつは！さては鷹野さんに妙くなことを吹き込まれたね…！！」

「でも園崎家が黒幕なんだから！？」

「んー。本当は内緒なんだけど実は園崎家頭首には、自分の都合の

いいことが起こったら黒幕であるかのように振る舞うっていう決まりがあるんだよね」

「どういうことだよ？」

「つまりハッターをかますということね」

「そ、そうなんですか!？」

俺はコナンの方を見た。すると、ほらね、という顔で見返してくるこいつは本当に侮れないぜ!

「本当は婆っちゃんも困ってるんだよ」

「でもよー、園崎家が黒幕じゃないとしたら一体誰が犯人なんだ？」

「やっぱりオヤシロさまの祟り!？」

「みい…オヤシロさまは悪い神さまなんかじゃないですよ」

「レナもそう思うな。な!」

「いつもあうあう言ってる、甘いものが大好きな神さまなのです随分と可愛い神さまだな…」

「さて、圭ちゃんたちも戻ってきたことだし新しいゲームでもやりますか!少年探偵団諸君!!推理ゲームにチャレンジしてみないかね?」

「」「」「サンセー!」「」「」

6・祭具殿

灰原と境内を歩いていると、古い建物の前で富竹さんと鷹野さんを見かけた

「どうジロウさん?」

「うん。シンプルなタイプだと思うよ。道具があれば、多分、1分とかからないよ」

「さすがね。ジロウさんが得意なのは心の奥の錠前外しだけじゃないのね。クスクス」

「何してんの?」

オレが声をかけると、2人とも驚いて振り返った

「なんだ、コナン君に哀ちゃんか。2人でデートでもしているのかしら」

「違うよ!」

「本当に心外だわ…」

「悪かったな。で、鷹野さんたちは何してるの?」

「内緒よ? 綿流しの日に祭具殿に忍び込もうと思ってるの。今日はその下調べ」

「祭具殿ってこの古い建物のこと?何か特別なものがあるの?」

「それはね…。この中には雛見沢村の秘められた歴史が…」

「…祟りじゃ…」

今度は、2人は飛び上がって驚いた

「あら、梨花ちゃん、こんにちは。急に驚かすなんて人が悪いわね」

「…開かずの祭具殿の鍵を開けちゃおうとする人の方が、もっと悪いのです」

「あははははは…、駄目だよ鷹野さん。やっぱり悪いことはするもんじゃないよ…」

富竹さんはあっさり罪を認めて降参したが、鷹野さんは貴重な文化遺産がどうのこうのと下手な言い訳して、なんとか誤魔化そうとし

ている

…よくもまあそんな苦し紛れを涼しい顔で言えるもんだ

「鷹野さんってさあ、灰原に少し似てるよな」

「ハア？」

「いや、何考えてんだかわかんないところがさ…」

鷹野さんの言い訳が終わらないうちに、梨花が口を開いた

「…中に入れてあげてもいいですよ」

「ほッ本当に！？ 祭具殿の中よ？ 中は中でも防災倉庫の中とかはなしよ！？」

「本当ですよ。ちゃんと祭具殿の中に入れてあげますです。にば〜

」

「に…、にば〜、> < ノー！！」

鷹野さんはバラの花びらをばら撒きながら、くるくると踊り続けていた。こ、こんな人だったのか…

「おい梨花、本当にいいのかよ？ お前、一応この神社の巫女なんだから」

「コナン。一応じゃなくて、ボクはれっきとした古手神社の巫女なのですよ。…それにどうせ綿流しの日に、この中に忍び込むに決まっているのです」

「梨花ちゃん、聞いていたのかい？」

「聞かなくてもわかります。いっつもそうなのです」

「毎年こんなことしてんの？」

半ば呆れながら聞くと、富竹は焦りながら反論した

「人聞きの悪いこと言わないでよ。僕も鷹野さんも今回が初めてだよ…」

「そうでしたか？ にば〜…それより富竹。中には内緒で入れるのですから、他の人に見つかってはいけませんですよ」

「あ、ああ、そうだよ。鷹野さんを正気に戻しておくよ」

「…ボクはその間に鍵を持ってきますです。コナンと哀も来て下さ

い

鍵なんて一人でも持っていけると思ったが、ネジが外れた鷹野さんの相手をするのも面倒なので、オレと灰原は梨花についていくことにした

7・祭具殿2（梨花サイド）

さて、どうしたらいいものか…

私は鍵を取ってくる間、コナンと哀を祭具殿に入れないために、2人をどう説得しようか考えていた

そして鍵を持って鷹野たちのところへ戻る途中、私は立ち止まり、後ろにいるコナンと哀に言った

「お願いがあるのです。…2人は祭具殿に入らないでほしいです」

「なんでだよ？」

「きつと良くないことが起こりますです…」

祭具殿に鷹野と富竹以外の人間が入ると、ろくなことがない。圭一と詩音が、鷹野たちと一緒に祭具殿に入った世界がいい例だ

…幾多の世界を経験してわかったことは、必ず鷹野と富竹は綿流しの夜に死ぬということ

それでこの2人が、一緒に祭具殿に入った自分たちも殺されると思い込み、あの世界の詩音みたく、更なる悲劇を生み出す可能性だつてある

…それは絶対に避けなければならない

しかしそんなことを言えるはずもなく、結局はうまく伝わらない次第にイライラしてきて、つい地が出てしまう

「…あなたの親は、あなたが赤信号の横断歩道の真ん中にいる時、どうして危ないのかを全部説明し終えるまで、あなたの手を引っ張らないの？引っ張るでしょう？まず歩道まで連れ戻してから、なぜ危険なのかを説くでしょう？」

…つまりはそういうこと」

2人は、“目の前にいる少女は、古手梨花なんだけれども、古手梨

花じゃない”：そんな驚愕の表情を浮かべていた

そしてこの後、私もこの2人と全く同じ表情をすることになる

「だから祭具殿には…」

「嫌だね」

「え？」

「可能な限りとことん深入りしてやるぜ…。オレの中の好奇心ってヤツが渴ききるまでな!!!」

この人………誰？

コナンじゃない。絶対ちがう。よくわからないけど、私の知らない誰かが…見えた気がした

「まあ、あなたに彼は止められないでしょうね。いつも危険なことに首を突っ込みたがるんだから…」

哀がため息混じりに言う。

きつと、いつもハラハラさせられているのだろう

「お前は…何者のですか？」

「江戸川コナン…探偵さ！」

「探偵…ね。だったら好きにすればいい。鷹野の話聞きながら、にやーにやーにやーにやーにやー怯えていればいいのですよ。くすくすくすくすくす！」

8・祭具殿3（梨花サイド）

鍵を持って帰る頃には、鷹野はすっかりいつもの落ち着いた様子に戻っていた。

でも、堪え切れなくなるのか、たまに表情が崩れて、だらしくエヘへと笑い出す

…一見、ものすごく大人っぽく見えるのに、実は1番子供っぽい人なのかもしれない。これじゃあ、お持ち帰りモードのレナと似たようなもんだ

こういうギャップを萌えと言っただっけ？

圭一にどこかで習ったが、用法がいまいちよくわからない…

コナンと哀は、富竹と笑いながら雑談をしていた

…こうして見ると、さっきコナンに感じた奇妙な違和感は、やっぱり気のせいだったんじゃないかと思ってくる

「それで、撮影は可能なの!？」

鷹野が目を輝かせながら聞いてきた

「…みー。可能ですが、1枚100円なのですよ」

「ええええええ!!ジロウさん、あなた今いくら持ってるかしら!？」

「…1万円払うと、お得な1日取り放題券になりますです」

「安い!!払うわ!!ジロウさん!」

本当に払ってくれた…

「富竹さんも大変だね…」

「いやあ、あはは…」

「1万円が安いってことは、彼女、最低でも100枚は撮るつもりよ」

「…富竹が表で待っていると不審に思われます」

「えっ！？ば、僕も入るのかい？」

「ジロウさん！梨花ちゃんが入れて言ってるのよ！早く入って！？」

「わわ、わかつたよ…！」

私は灯りのスイッチを入れると扉を閉めた。そして、内側からかぬきを掛ける。

「…嚴重なのね」

「錠前が外れていることに気付いた、悪い猫さんが入ってくると困りますのです」

「クスクス。悪い猫さんで申し訳ないわね」

「…鷹野、猫は猫らしく、にゃーにゃー鳴かないと駄目なのですよ。にゃー」

「そ、それはどういふことかしら…？」

「…鷹野がちゃんと猫さんじゃないと見せてあげないのです。ちゃんと鈴付き首輪と猫耳も持ってきましたですよ。これをつけて、四つん這いになってにゃーにゃー言ってくれなかったら、次の扉を開けてあげません」

今、私たちがいるのは前室だ。祭具殿は次の扉の向こうになる

「…おい、おまえ、それどっから出したんだよ？」

「ドラ○もんから貰った、四次元ポケットからですよ」

コナンが普通に話しかけてきたので、私も普通に答える。…なんだか鍵を持ってくる間の出来事が嘘みたいだ

「え、…ええ、いいわ。あなたが望むなら、猫耳ブルマー尻尾付きで、四つん這いになって空っぽのミルク皿の前で、ご主人様のミルクを飲ませて下さいだって言ってみせる…！」

「あ、…あのう、鷹野さん。そもそもこの扉、鍵なんかはないよ？ほら、押せば開く」

「そ、そうなの！？クスクス。あら嫌だ私ったらみつともない…。クスクス」

「「ち」」

「江戸川くん、古手さん…。あなたたち気が合いそうね」

祭具殿の中に入ると、鷹野はおびたらしい数の拷問道具を指差しながら、鬼ヶ淵村の暗黒史を嬉々として語っていた

…驚いたのはコナンと哀の反応だ。

コナンは興味なさそうに聞き流しているし、哀に至っては、怖がるどころか、鷹野の話に笑顔で頷いている。時々、鷹野と灰原がクスクスと笑う声も聞こえた

「灰原、オメー趣味悪いな」

「あら、血生臭いミステリーを読みあさっているあなたに言われたくないわ」

「ハハハ…」

…どうやらこの2人は、私が思っているよりずっと図太い神経の持ち主らしい。

この様子なら、詩音の時みたいない悲劇は起きなさそうだ

私がそんなことをぼんやり考えている間も、鷹野の話はどんどんエスカレートしていった

そして、その鷹野の妄想的演説は、ドタンドタンという騒々しい音に遮られた

9・祭具殿4

富竹さんは唇の前に人差し指を立て、沈黙を促していた。

「…何事なの？」

「うん…。…さっき、子どもが遠くで飛び跳ねる音が聞こえたんだよ。…この建物の周りで子どもが遊んでいるのかもしれない」

「……………そう？……………私には何の気配も感じないけど…？」

オレも何も感じない。灰原もそうみたいだ

「…富竹。周りに子どもなんて居ませんですよ」

「そうかい？梨花ちゃんには聞こえなかったかい？」

「もちろんボクも聞きましたですよ。…遠くではなく、ボクのすぐ後でドタンドタン跳ねていましたです。富竹には遠くに聞こえたでしょうが、ボクにはすぐ後だったので、うるさいくらいでしたですよ」

梨花の後には祭壇があり、そこにはオヤシロさまのご神体が立っている

梨花が薄気味悪いことを言うので、富竹さんは見る見る青ざめていった

…この場に蘭がいたら大変だっただろうなあ

「…鷹野。祭具殿の中でオヤシロさまを怒らせるようなことを言うのは禁止なのです。オヤシロさまがとても怒っていますのです。その声が聞こえませんか…？」

「…ごめんなさい。いささか調子に乗りすぎたわ。オヤシロさまもごめんなさい」

「オヤシロさまは甘いものが大好きなのです。ボクを経由してお供えしないと、祟りがありますですよ」

「今度シュークリームを買ってきてお供えます」

鷹野さんはそう言って頭を下げた

「オヤシロさまは、シュークリームは最低でも3つ欲しいと言って

10・祭具殿5（詩音サイド）

祭具殿から話し声が聞こえてきたので、わたしは思わず圭ちゃんのを腕を引つ張つて集会所の陰に隠れた

圭ちゃんは、どうしたんだ？詩音？なんて間抜けな声を出しているお姉と同じで、ほんつとに空気が読めないんだから！

「しっ！祭具殿から誰か出てきます…！」

どんな奴が出てくるのかと思いきや、あらびつくり！賊の中に梨花ちやまがいるじゃないか！しかも観光客のコナン君と哀ちゃんまで。三四さんと富竹さんは…まあ納得

「ちよつとちよつと、どうなってるんですか？古手家頭首が、神聖な祭具殿に賊を連れ込むなんて…！」

「賊つて…。というより、梨花ちゃんは祭具殿に入ったコナンたちを連れ戻しただけなんじゃないか」

「いや…、あの雰囲気はそういうんじゃないやありませんよ。みんなで仲良く忍び込みました」という感じです」

わたしたちに見られているとも知らずに、三四さんは笑顔で梨花ちやまにお礼を言った

「今日は本当にありがとう！ちゃんと、おいしいシュークリームをお供えするわ。…それじゃ、そろそろ失礼しようかしら」

その時、哀ちゃんが三四さんの袖を引つ張る

「何かしら？哀ちゃん」

「鷹野さん…、今あなたがやるうとしてる事…後悔しませんか？それは不思議な響きだった。まるで誰かに言われたことを、そのまま繰り返しているような…」

「……何を言ってるのかわからないわ。行きましょ、ジロウさん」

「え、ええ…！」

三四さんたちがいなくなると、哀ちゃんは、今度は梨花ちやまの方に振り返った。

…そしてさつきと同じ、不思議な響きで言った

「それと古手さん…。逃げてばっかじゃ勝てないわよ！！ぜーったい！！！！」

その言葉に梨花ちゃまは、はっとしたような顔をする

「梨花さ、何か相談したいことがあるんじゃない？…例えばあそこで隠れている2人とかに」

ばれてた！！

わたしと圭ちゃんは、物陰から飛び出た

「！圭一、詩音！いつからそこにいたですか！？」

「え〜と、梨花ちゃま達が祭具殿から出てきた辺りですね。あはは

…」

「そうなのですか…。実は、みんなに話したいことがあります。とても大事な話なのです」

「わかった！いつでも聞くぜ！」

「明日、部活の時に話します。詩音も聞いてくれますか？」

「もちろんですよ！興宮の学校から駆け付けますよ！」

「できれば少年探偵団のみんなにも聞いてほしいのです」

「えっ！？あいつらもか？」

「あら、いいじゃない。あなた1人で行ったら、またぬげがけだ、なんて言われるわよ」

「…わあったよ」

「それじゃあ明日、学校で会いましょう！」

そしてわたしたちは手を振って別れた

…明日はきつとなにかが大きく動く。そんな気がする

11・みんなに相談

教室で梨花は、村人全員が感染しているという雛見沢症候郡のこと、それを研究しているのが入江診療所で、そのスポンサーにあたるのが『東京』という大きな組織だということ、そして自分は昭和58年の6月…つまり今月中に何者かに殺されることなどを打ち明け始めた

最初は信じられなかったが、聞いているうちに、梨花が言っているのは本当のことなんだと思うようになった
まあオレ自身、身体が縮むなんていうありえないことも経験してるしな

「つまりよー、東京って秘密結社なんだろ！？なんかカツコイイよな！」

「こんな大きな依頼初めてだね！」

「ええ！少年探偵団の本領発揮ですわね！！」

元太たちが気楽に騒いでいると、事の重大さに閉口していた部活メンバーたちも、一緒に盛り上がったいった

最初に口火を切ったのは圭一だ

「よし！！俺達も少年探偵団に負けてらんねえなあ！！！へっへっへ…！それにしても、面白くなってきたぜ…！みんなも本当はそう思ってたんだろ？今こそ部活メンバーの実力、見せつけてやるうぜー！！」

「ええ！梨花の命を狙う輩ですもの。部活メンバーですら使うのをためらっていたトラップの数々を、遠慮なくお見舞いして差し上げますわ！！」

「園崎家の断りなしに雛見沢で好き勝手やるなんて、どこの誰だか知りませんがいぶんとナメられたもんです。ねえ？お姉」

「くつくつく！園崎家はともかく、部活メンバーを敵に回したことは犯人にとつて大きな痛手だよ！わたしはあらゆる戦闘技術、指揮技術がランクS！！それに沙都子のトラップが加われば、向かうところ敵なしだね！！」

「問題は、誰が梨花ちゃんを殺そうとしているかだね…。それによつて得をする人物が犯人なんだろうけど…」

バランスのとれたメンバーだと思った

圭一は部の火付け役だし、部長の魅音は追い風になればなるほど調子が出るタイプだ。ムードメーカーのこの2人に対して、レナは冷静に物事を見ている。年少の沙都子と梨花、それと部活メンバーではないが詩音も、一癖も二癖もありそうだ

「あなたはもうわかってるんじゃない？古手さんを狙っている犯人…」

灰原がオレに聞いてくる

「ああ。多分あの人だと思うんだけど、どうもしっくりこないねえんだよな…」

「えっ！コナン、犯人わかったのか！？」

「どうしっくりこないのかな、かな？」

「うん…。梨花の話だと、女王感染者である梨花が死んだ48時間以内に、村人全員が末期症状を起こすじゃない？」

「そうなのです。ボクが死ぬと大変なことになるのです…」

「それによつて得をする人物が1人だけ、いるにはいるんだけど、リスクが大きすぎるといいますか…」

「もったいぶらずに、さっさと喋ってくださいませ！！梨花が死んで誰が得をするといえますの！！」

「難見沢症候郡の研究に、1番熱心に取り組んでいる人だよ」

「もしかして…、鷹野、ですか？」

「コナンくん、それはありえませんか！まだ研究打ち切りまで3年もあるんですよ！女王感染者の梨花さんが死んだら、その時点で

研究が続けられなくなってしまうんじゃないですか!!」

「歩美も光彦君と同じ意見だなあ。だって三四お姉さんにとって、すごく大切な研究なんでしょ?」

「大切な研究だからよ…」

みんなが一斉に灰原を見る

「大切な研究だからこそ、自分の手で幕を閉じたいと思うんじゃない?それに、女王感染者の死後に村人全員が末期症状を起こしたら、その研究が正しかったことも証明できるしね」

「でも、もしそれが間違っていたらどうするんです?その賭けはちよつと危険すぎじゃありません?」

「詩音姉ちゃんの言う通りだよ。それだけの理由じゃないはずなんだ…。クソツ!ここまで出かかっているのに…!」

「そついえば、入江に聞いたことがありますです。ボクが死んだら緊急措置が発動される、と…」

「緊急措置とは何のです?」

「ボクの死後48時間以内に、自然災害に見せかけて村人全員を抹殺してしまうのです。2000人が疑心暗鬼に陥って暴走してしまつたら、被害は村だけに収まりませんですから…」

「それだ!!」

オレと圭一は、ほぼ同時に椅子から立ち上がった

「どういふことかな、かな?圭くん、コナン君?」

「その緊急措置が発動されれば、東京のエライ人は、きつと責任をとらされるよね?」

「それで得をする奴が、東京の内部で出てくるんじゃないか?」

「そうか!世の中に吹く風は必ずどちらか一方に流れる!それはある人にとっては逆風になるけど、必ずいる反対向きを向いている人には追い風になるんだね!」

「その通りだぜ、魅音!そうなると見えてこないか?黒幕の存在が」
「鷹野を利用しようとしている人物が、東京の中にあるということ

ですか？」

「「そういうこと！」」

「自分の研究を否定されて落ち込んでいる時に、私は信じてるよ！頑張つて、なんて言われたら簡単に取り入っちゃうね。プライドが高い人ほど、もろいものだから」

「そうだね、レナ姉ちゃん。それにそんな大規模な緊急措置が行われるとしたら、必ず国のトップに許可をとるよね？その時使われるのが、鷹野さんが書いた論文つてわけ！これつてすごい名誉なことだよな！もう誰も鷹野さんの研究を馬鹿に出来ない」

「でも実行役の鷹野さんは始末されてしまいますわね。黒幕にとって、生かしておく価値がございませんもの」

「ん〜、これはわたしの考えなんですけど…。三四さんもそれはわかってるんだと思います。ただ意地になつてるといふか…」

「詩音の言う通りだな…。梨花ちゃんや雛見沢のみんなを、自分の研究のために殺そうとする悪い奴だけど…。そう考えるとちよつと同情しちゃうな」

「でも鷹野を倒さない限り、昭和58年の7月をみんなで迎えることが出来ないのです…」

「そうだね…。それじゃあ鷹野さんに打ち勝つためにはどうするか、うちん家で相談しようか！そろそろ最終下校の時間だし、それに園崎家はいろんな設備があるから、作戦会議にはびつたりの場所だよ！それと梨花ちゃん、監督たちには相談した？」

「まだなのです。誰を信用していいかわからなかったですから…」

「そうか。この戦いには大人の協力が必要になつてくると思う。入江機関の関係者である、監督と富竹さんは欠かせないね！あと、警察の助けもいるかもしれないから、大石さんも味方につけたいな…。この3人にも園崎家に一緒にきてもらおう！梨花ちゃん、いいよね！？」

「ボクは全然構わないですよ」

「それじゃ、監督、富竹さん、大石さんと合流した後、園崎家へ集

合ってことでいいかな？」

いつのまにか、魅音がその場をしきるようになっていた

どうやら指揮技術がランクSというのは、大袈裟でもなんでもない
ようだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5217f/>

ひぐらしのなく頃に～粗探し編～

2010年10月10日18時33分発行